

ダイバーシティ推進局視察報告

日本維新の会ダイバーシティ推進局

視察参加者

【目的】

ダイバーシティ推進局の活動方針の一つに「より見聞を広めることを目的とした勉強会や視察等の開催」を掲げている。

今回は、障がい者の働く場所や高齢者向けの介護施設等数多くの施設を運営し、近年では年齢、性別、国籍、障害の有無に関わらず、さまざまな個性を持った人々が集うコミュニティ拠点づくりに取り組んでいる**社会福祉法人 佛子園**を視察し、福祉制度の縦割り・枠組みにとらわれない支援・共生の取り組み推進の一助としたい。さらには、今般の能登半島地震・奥能登豪の被災地域にあり、本法人事業所を拠点にした災害対応・被災地支援、避難所運営を学ぶ機会にもしたい。また、幼児教育総合事業で国内トップシェアの**株式会社ジャクエツ**を視察し、同社が掲げる理念「未来は、あそびの中に。」のもと、幼児保育・教育の環境整備を通じた子どもの成長と社会課題の解決への取り組みを学びたい。

加えて、国内外で高い人気と知名度を誇る日本酒ブランド『黒龍』などを手掛ける黒龍酒造の親会社である石田屋二左衛門株式会社が2022年春にオープンした観光施設「ESHIKOTO」を視察し、日本酒ブームの中、海外戦略も視野に入れた取り組みを調査したい。(ダイバーシティの範疇ではないが、視察先地域での地方創生の取り組みとして選定。)

【視察参加者】

大阪府議会議員 みよしかおる
衆議院神奈川県第5選挙区支部長 久坂くにえ
神戸市議会議員 なんのゆうこ
忠岡町議会議員 おざき孝子
東京都北区議会議員 佐藤こと
日野市議会議員 伊東秀章
徳島市議会議員 おさだよしなり
堺市議会議員 上野あつし

【日時・場所】

8月4日(月)

・B's 行善寺 11:00～13:30 ・西園寺 14:00～15:00 ・小松カブーレ 15:15～16:00

8月5日(火)

・ESHITOKO 10:30～12:00 ・第二さみどり幼稚園 13:00～13:45

～(福)佛子園 雄谷良成理事長 講演 B`s 行善寺にて～

社会福祉法人佛子園が推進する「ごちゃまぜ」の理念と実践についてお話しいただいた。従来の縦割り型福祉サービスに対する根本的な問題提起であり、新しい福祉のあり方を示すイノベータティブな取り組みである。

1)「ごちゃまぜ」の本質的価値

「ごちゃまぜ」の本質は、多様な人々が「ありのままでいられる」居場所を創出することにある。これは単なる福祉サービスの統合ではなく、人間の尊厳と社会参加を重視した包括的なアプローチである。高齢者、障害者、子ども、地域住民が自然に交流する環境の中で、相互理解と支え合いの関係が生まれ、すべての人の健康と福祉の向上につながっている。

2)健康概念の拡張

WHO の健康定義における「社会的」側面に注目し、人と人とのつながりが健康に与える影響を重視する視点は、現代社会の孤立問題に対する重要な示唆を提供している。生きがいと生存率の関係、要介護発生リスクの軽減など、科学的根拠に基づいた健康効果の実証は、「ごちゃまぜ」の有効性を裏付けている。

3)災害対応における優位性

能登半島地震における佛子園の対応は、「フェーズフリー」という概念の有効性を実証した。平常時から多様な人々が交流し、地域との関係性を構築していたことが、災害時の迅速で効果的な対応を可能にした。一方で、従来の施設型福祉の脆弱性も明らかになり、災害時の福祉支援体制の抜本的見直しの必要性が浮き彫りになった。

4)地域移行の新しいモデル

従来の地域移行政策が抱える課題に対して、「ごちゃまぜ」は段階的な関係性構築を通じた解決策を提示している。物理的な移行だけでなく、心理的・社会的な移行を重視し、時間をかけた丁寧なアプローチを採用することで、真の地域移行を実現している。

5)持続可能な福祉システムの構築

職員の働きやすさの向上、離職率の改善、地域住民の自発的参加など、「ごちゃまぜ」は持続可能な福祉システムの構築にも貢献している。これは、人材不足に悩む福祉業界にとって重要な示唆を提供している。

6)今後への期待

佛子園の取り組みは、60年の歴史を持つ施設が社会のイノベーターとして注目される過程を示している。全国への展開、制度改革の推進、中山間地域のモデル構築など、今後の発展可能性は大きい。

しかし、その実現には制度的課題の解決、人材確保と育成、地域特性に応じた適応など、多くの課題も存在する。これらの課題を一つ一つ解決していくことで、「ごちゃまぜ」の理念がより多くの地域で実践され、すべての人が尊厳を持って生きられる社会の実現につながることを期待される。



質問) 国は地域共生社会の実現を掲げているが、障がい者グループホームの建設時に地元住民が反対するなど現実は厳しい。どうすれば地域移行は進むか？

回答) 地域の人に家族同様に障がい者を受け入れられるようにすることが必要。日頃から関係性を持ち、知っていないとダメ。急にいくと、地域の人だけでなく障がい者の方もびっくりする。日頃からごちゃまぜにすることが必要で時間がかかること。まずは、ここへ来て体感してほしい。ごちゃまぜをみてもらって、お風呂入って肌で感じるのが大事。言葉で言っても難しい。

雄谷良成理事長の「本来あるべき姿、人そのもの」という言葉は、福祉の原点を思い起こさせる。技術や制度の進歩も重要だが、最終的には人と人とのつながりの中にこそ、真の福祉の価値があることを、佛子園の実践は示している。

～視察先①:B's 行善寺 <石川県白山市北安田町 549-5>～

○面談者:施設長 清水愛美氏

○報告内容

・「ごちゃまぜ」を具現する場所

ごちゃまぜとは関係人口と居場所づくりで創られる。

健康とは、身体と精神的な健康という従来の医療と施設のあり方を超え、社会的にも満たされている事で実現される。

上記理念のもと、社会福祉法人佛子園は高齢者、子ども、障がい者全ての人に開かれた場所、集える場所としてB's 行善寺等を設立・運営している。

住民自治室、保育園、クリニック、温泉、児童発達支援センター、カフェ、学童施設など文字通り多様な機能を持つ。

- ・同施設には、日々地元住民、温泉を利用する住民ボランティア、就労支援センターで働くスタッフ、子どもたちがそれぞれに集い、そこにいることが当然の存在として各々が受け止め、居場所の機能を果たす。

- ・なお、雄谷理事長が代表を務める(公社)青年海外協力協会の120職種以上、年間1000人以上の帰国隊員が全国に派遣され、日本各地で地方創生事業を担う。

- ・また2024年元旦に発生した能登半島地震復興・復旧事業における復興住宅の設置では、孤立からなる関連死を防ぐ取り組みとして、大浴場付きのコミュニティセンターを設置している事も特筆に値する。

(大浴場、温泉はとりわけ雄谷理事長が思い入れを持っており、どの施設にも展開している重要要素。コミュニティセンターで、人々が入浴し、食事をとり、無理なくコミュニケーションを図る場となる)

- ・災害救助法改正を雄谷理事長は高く評価している。

同改正により避難所に行くことができない被災者にDWATを派遣できるようになるなど、支援を速やかに届けることが可能になるほか、事前の態勢整備も進むとして、災害関連死を防止することが期待される。

○ 所感

- ・とにかくこの現場を議員、行政関係者などに見てほしいとの雄谷理事長の言。

確かに素晴らしい施設で、一目見れば私たちの街にもこういう施設があれば、と誰もが実感するであろう。孤立を防ぎ、年代、立場を超えた全ての人に居場所を提供している。

いますぐ各地域において、同レベルの施設の実現は難しくとも、私自身の地方議員の経験からは、最初の一步として、高齢者のみ、子どものみ、健常者のみが見える「施設」から脱却し、多世代・多様な層が見える機会を増やしていくことが肝要と考える。なお所属していた鎌倉市議会では、高齢者施設の開所時間拡大により、夜間の青年層利用、また多世代利用デーの定例設定などを提案した。そして保育所の立替の際に、子ども支援センターの設置も要望し、実現している。施設のリニューアル、建て替えなどあれば、必ず多世代、多様性を最大限考慮した施設となるよう議会として提言していく事も必要ではないか。現行の施設も、法律に則った条例での施設運営に縛られることなく、各自治体で上乗せ条例改正等で施設運営の可能性を広げていくことも検討すべきである。

- ・また災害救助法改正については、これだけ災害の経験を積み重ねていてもまだ改正の余地があったことは衝撃であった。災害救助・復興において何がボトルネックとなるのかを明らかにし、それを解決するキーとなる不断の法改正の必要性を実感した。
- ・全国的に進んでいると言い難い、災害時用援護者(高齢者、障害者、乳幼児を連れた家族、妊婦など)支援の進捗、支援のあり方をダイバーシティ推進局の一つの課題として取り上げることも有効と感じた。





～視察先②:三草二木西園寺 <石川県小松市野田町丁68番>～

○面談者:管理者 秋山翔太氏

○報告内容

・施設概要:天然温泉、西園寺カフェ、GOTCHA! WELLNESS(ジム)

・役割

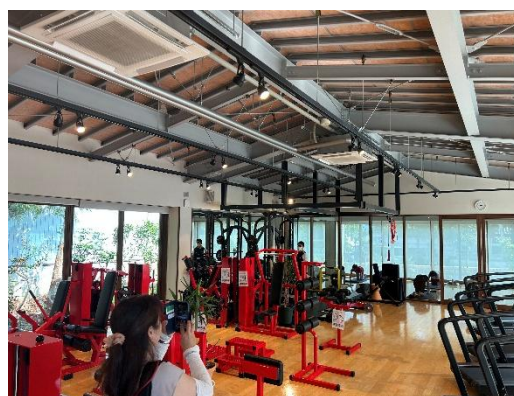
身寄りのない子どもたちを寺に住ませ、昭和35年3月「行善寺」の一角に児童養護施設「佛子園」を開設したことから始まり、現理事長の雄谷氏自身も成長をともにした。「三草二木西園寺」は「B's 行善寺」の先駆けとなった施設で、「ごちゃまぜ」(あらゆる人々が区別なく集まりつながる)の場づくり、地域活性化と住民の自主的な活動を支援する拠点づくり、ウェルネスを通じた健康推進事業などを行っており、障がい者に関わらず、高齢者から子どもまで誰でも分け隔てなく集まることができる場所を提供してる。

特徴的なことは、従来の福祉施設とは違い敷地内に食事処やスポーツジム、レストランやカフェ、その他にも地域住民は無料で入れる温泉など多様なサービスが受けられる施設となっており、地域のあらゆる方が集い、働いている人も障がい者や地域住民が自然と地域に溶け込んでいるのが特徴的。

○所感

廃寺の再建から始まり、その地域の特性を最大限に活かした「ごちゃまぜ」の社会を創り出している。私たちが従来目にする福祉施設とは大きく異なり、温泉、レストラン、カフェやフィットネスジムなど、普段みんなが集いやすい施設を集め、自然な交流を生み出している。福祉が地域社会から切り離された別のものではなく、みんなの暮らしの中に当たり前にあるべきだと教えられた。本来、私たちは地域の中でつながり生活してきたはずであるのに、いつの間に

か壁をつくり、その結果、孤独や孤立を生んできたのではないかと思う。
地域共生社会を考える上で、「ごちやまぜ」の成功事例を学ぶことができ、他都市でも今後考えていかなければいけない問題であると感じた。



～視察先③:小松カブーレ <石川県小松市土居原町 13-18(JR 小松駅)>～

○面談者:責任者 秋山翔太氏

○報告内容

・施設概要:小松駅構内(7時～21時) 誰でも自由に使えるフリースペース

2020年12月から北陸新幹線の開業を機にコミュニティづくりを軸とした小松駅の再編から計画し、延床面積273㎡。以前の小松駅は最低限の機能だけの駅で待合スペースもなく電車待ちの利用者の居場所がなかった。また、小松駅前商店街も閉店が相次ぎ地域住民の集う場所がない状態であった。このような問題を解決するために駅を地域交流の結節点と捉え、誰でも気軽に使えて飲食も出来るフリースペース兼飲食店「こまつカブーレ」が駅の中に計画された。「こまつカブーレ」は「歌舞伎」「かぶく」「かぶれる(夢中になる)」からネーミングされ、みんなでKABUいて小松を元気にしましょう！がコンセプトである。電車の待合いや勉強など、飲食がとまなわない利用もでき、店内には小松駅前商店街の協力のもと、かつて小松を支え、愛されたお店の面影を散りばめている。この“ごちやまぜ”空間から小松の歴史を

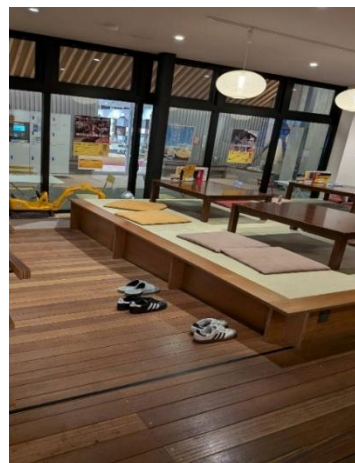
つなぎ、小松を元気にしている。客席は、高齢者に人気のテーブル席、PC 作業ができるビッグテーブル席、お子様連れや中高生に人気の小上がりの畳席(天井を下げて床高を上げている)カウンター席等様々な席がある。地元の採れたて野菜や駄菓子を販売し地域住民が日常的に訪れる仕組みを設けている。調理、清掃のスタッフとして、障がいのある人や海外留学生を雇用し、様々な人が地域の中で活躍できる場となっている。朝7時から開いていることから周辺のホテル宿泊客の朝食にたまごかけご飯が人気である。

○考察

市町村レベルで自宅以外で過ごせる居場所が必要である。特に不登校、引きこもり、18歳以降の発達障がいの人等は、居場所がないことが社会課題である。地域でごちゃまぜに過ごせる場所があれば、将来の不安が払拭される。さらに、小松駅のように駅近くの商店街などがその居場所であれば、通勤者や観光客、高齢者の方々から子どもたち、障がいのある人等が触れ合える広がりのある共生社会が出来ると考察する。

○余談

視察中小松カブーレの壁に貼られた『帰りのことは考えない』というポスターが気になった。北陸の人気ブルワリー8社が提供する約48種類のクラフトビールのお祭り「駅ビア小松」、2023年より開催されて、駅前ビアフェスタ今年は第3回となる。今回は「万博×アニメ」で小松駅下車、降りてすぐの15秒の広場で、8月30日10:30～開催される。去年は雨天だったが、開催され、飲まれた方の最高数が65杯だったとのこと。凄すぎる。



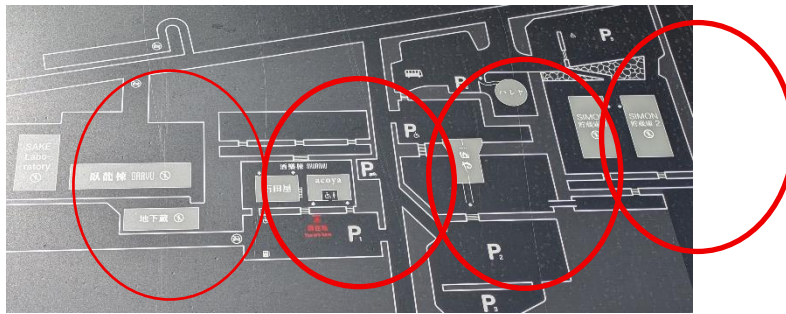


～視察先④:ESHIKOTO <福井県吉田郡永平寺町下浄法寺 12-17>～

○面談者:(株)石田屋 ESHIKOTO 店 Sommelier SAKE DIPLOMA 加畑未央氏

○報告内容

- ・施設概要:ESHIKOTO(えしこと)とはさまざまな「えしこと(良いこと)」が出会い、交わる場。
永(とこしえ)に続くの「とこしえ」を逆から読むと「えしこと」となる。



4ブロックからなりメインブロックは、酒楽棟は acoya(アコヤ):食事処及びお土産

石田屋 ESHIKOTO 店は酒蔵黒龍のサテライト店で、ここだけでしか買えない限定酒 などの
テイスティングを楽しみ、気に入ったお酒を購入できる店舗の 2 棟からなる。外の芝生ス
ペースはイベントスペースとして利用されている。



ESHIKOTO 店

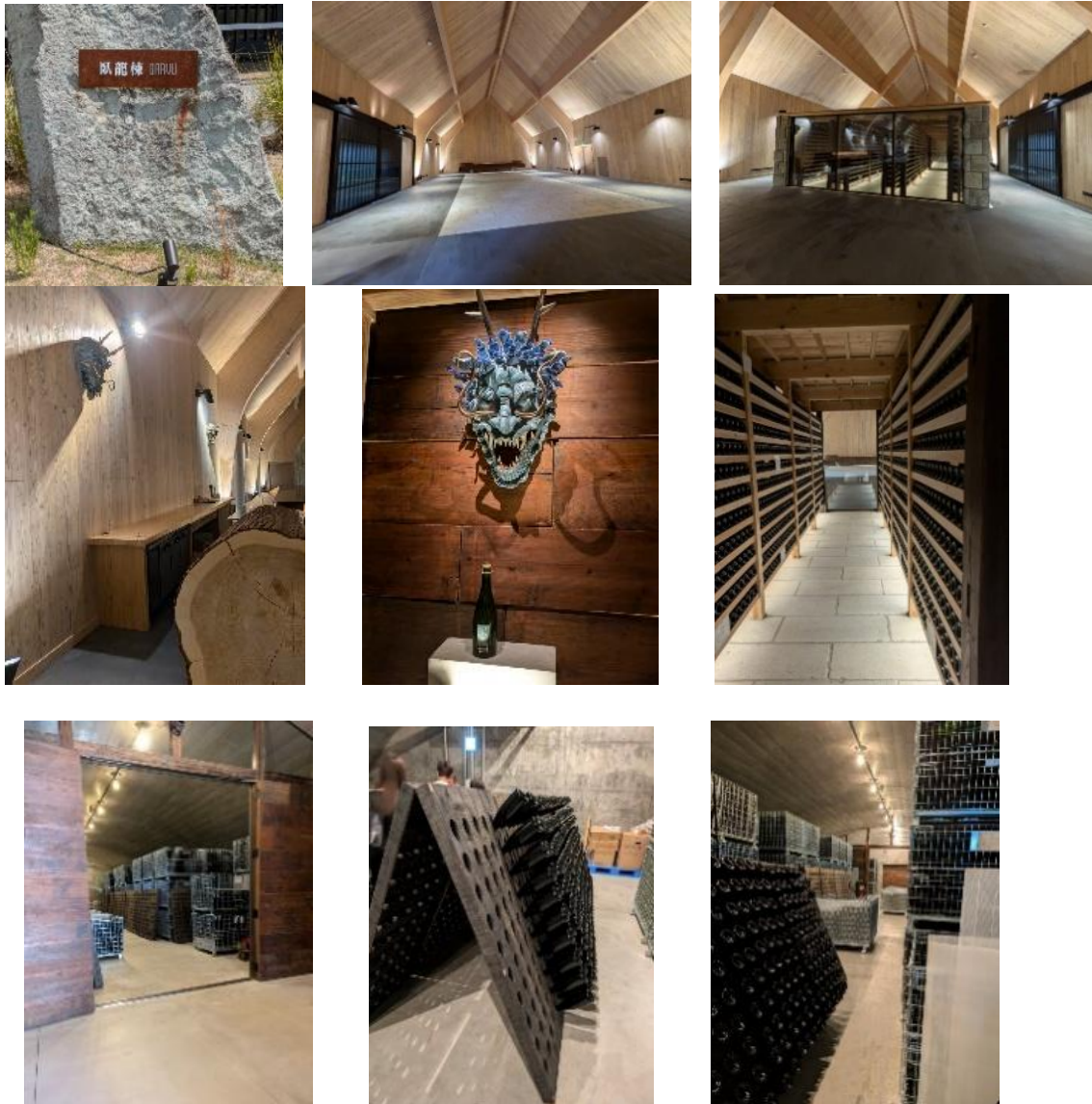


acoya(アコヤ)



芝生イベントスペース

- ・2つ目のブロックは、臥龍棟:日本酒セラー(貯蔵庫)、
地下蔵:スパークリング日本酒のあく抜きや製造とビン詰め。



3つ目のブロックは、蕎麦山や：十割蕎麦と日本酒が楽しめる。打ちと蕎麦食事処、ハレヤ：パンの製造販売のベーカリー、黒龍の酒粕を使用したあんぱんなど酒蔵らしいパンなどを通して北陸の食文化を発信



蕎麦山や



ハレヤ

・4つ目のブロック目は、酒類の貯蔵庫がある。

○所感

ESHIKOTO(えしこと)は、食事処・酒類販売・芝生でのイベントスペースなど観光や日本酒づくりを通してまちづくりを行い賑わいの創設を行っている。酒蔵が経営していることから、お酒をテーマに様々な取組がされていた。日本酒のみならずスパークリング日本酒などここだけでしか購入できない限定酒など試飲を楽しんで気に入ったお酒を購入できる。今回は、視察と言うことで日本酒の試飲はできなかったのもた機会があれば再度訪れて次回は試飲を楽しみたい。

～視察先⑤:第二さみどり幼稚園 <敦賀市市野々町 1-110>～

○面談者:株式会社ジャクエツ 常務取締役杉田隆氏

○報告内容

・早翠学園の保育ポリシー

1. 心身のバランスのとれた成長を
2. 個性を尊重し、それに応じた保育を
3. 子ども達にとって、よりよい環境を
4. 豊かでより有意義で、多様な経験を
5. ポジティブで、ハイレベルな人間育成を

幼児教育の必要性を痛感した創設者(仏教寺院住職)が、大正5年に県知事より認可を受けて設立。仏教的な慈愛の精神に基づき、「心とからだの健やかな子どもに育てよう」という教育目標のもと、100年の歴史を持つ伝統的な幼稚園。

子どもたちの経験の『幅広さ』と『奥深さ』と『高度さ』を徹底的に検討し、日々のカリキュラムの目的・狙いを明確化した上で子どもたちに多様な経験を提供している。幼児の発達段階を踏まえ、子ども達の成長にふさわしい教育環境の充実に努め、自社製品の遊具・教具、積み木や絵本などを実践的に効果検証、製品改良をできる現場でもある。また、自然と触れ合う環境もあり、竹藪から顔を出すタケノコ、流れる水音、秋の落ち葉や木の実などが園庭にある。

○ 所感

遊びの中から子どもの心身が成長できる環境が見受けられる。また、遊具だけでなく、絵本や美術品にも思い入れがあり、高品質のものを丁寧に選んだ様子がうかがえる。園庭も広く、都市部の施設では体験することができない自然が目の前にあり、五感を刺激し、身体能力を伸ばせる設計や遊具が取り入れられており、子どもたちが生き生きと元気よく活動している様子に接することができた。



～視察先⑥:株式会社ジャクエツ 福井本社<福井県敦賀市若葉町 2-1770>～

○面談者: (株)ジャクエツ 代表取締役社長 徳本達郎氏

○報告内容

(1) 企業理念と教育的視座

- ・同社は「未来価値の創造」を理念に掲げ、あそびを通じた非認知能力の育成を重視している。
- ・特に3歳までの感情形成期に着目し、あそび環境の充実によって子どもの発達リスクを緩和する取り組みを行っている。

(2) RESILIENCE PLAYGROUND プロジェクト

- ・医療的ケア児が直面する「遊びからの孤立」という課題を解決するため、デザイナー・医療関係者・当事者家族らが共創。
- ・「揺れる」という身体条件に左右されない感覚に着目し、すべての子どもが自然と一緒に楽しめる遊具を開発。
- ・「障害児専用」ではなく、多様な子ども同士の自然な交流を促す設計が特徴であり、2024年グッドデザイン大賞を受賞した。

(3) 社会連携・地域貢献

- ・全国の自治体と協定を締結し、公園整備や地域課題解決を共同で推進。
- ・行政、市民、企業が協働する「三者協働」の街づくりモデルを実践。

- ・民間資金や技術を公共政策に結びつける先進事例として高く評価できる。

○ 所 感

今回の(株)ジャクエツへの訪問は、単なる先進事例の調査に留まらず、未来の社会を創造する上での極めて重要な示唆を得る機会となった。同社が実践する「特別扱いではないインクルーシブ」という思想は、まさに私たちの街づくりが目指すべき核心的な価値観であると痛感している。障害の有無にかかわらず、すべての子どもたちが当たり前のように共に遊び、学び、育ちあう環境こそが、真の共生社会の土台となる。これは、公園という一つの空間に留まらず、あらゆる公共空間において実現されるべき普遍的な目標です。

また、行政だけでは生まれにくい民間の斬新な発想と技術、そして課題解決への強い意志が、社会を大きく動かす原動力となることを目の当たりにしました。ジャクエツの取り組みは、民間企業が持つ力を公共の利益に結びつける公民連携の、最も成功したモデルケースの一つと言えるでしょう。

「すべての子どもが主役になれる居場所」を築き上げていくため、今回の視察で得た深い感銘と学びを胸に、官民の垣根を越えた連携の可能性を全力で追求していく必要があります。

